

『#魂の歌が聞こえるか』（真保祐一著）を読んでみた。

著者は『連鎖』で第37回江戸川乱歩賞を受賞。その後、様々な文学賞を受賞。『ホワイトアウト』、『奪取』、『灰色の北壁』、『百鬼大乱』、『英雄』等、著書多数。

最初に、音楽業界の裏方仕事を描かれている。無名の新人を売り出すのに多額の資金が必要らしい。失敗リスクも少なくない。有望な新人（グループ）を見つけても、問題が隠れていないか調査する。曲目については盗作ではないかも調べる。一曲を世に出すのに、音源制作や宣伝、広告、映像、販売、営業等の活動が必須となる。

話は、若き社員Sが扱いづらいベテランの売りこみで、社内外を駆けずり回るところから始まる。その一方で、新人グループの才能（魂を震わす歌）を見出したSがデビューさせるまでの奮闘が描かれる。

新人グループは訳あって覆面でデビューしたいという。その訳とは何か。それが、物語が進むにつれ徐々に明らかになってゆくのだが。

私の場合、小説の中で登場人物が聞いている曲名が出て来るとYouTubeで検索して聴いてみる。気に入るとその曲を聴きながら読書する（津村記久子の『水車小屋のネネ』に出て来る鳥のネネが好きな曲、プロコル・ハルムの「青い影」が入ったCDは購入してしまった）。絵画が出て来るとネットで検索して鑑賞するようになっている（マイクル・コナリーの警察小説の主人公名は中世画家ヒエロニムス・ボッシュと同じで、どんな絵なのか探してしまう。地獄絵）。

そんな中で「魂を震わせる歌」を楽譜もなく、メロディを聞かせることもなく、どうやって文字だけで読者を納得させるのか。難題に思えるのだが。

最後まで読み進めると、多分彼らが歌うのは「魂を震わせる歌」なのだろうと思わせてしまう物語になっている。